

櫻部 建著

『佛教語の研究』

香川 孝雄

本書は過去二十年ほどの間に各種の学会誌に発表された佛教語に関する小篇を集めた論文集であり、最後に附篇として『入阿毘達磨論』のチベット文よりの和訳が収録されている。

著者は『阿毘達磨俱舍論』のような高度に発達した体系的な阿毘達磨論書に盛られている思想を、誤りなく理解しようとするためには、そこに用いられている術語、特に基本的な術語の意味をひとつひとつ正しく把握することが、必須の要件である。(五二頁)と述べているが、それと同様なことが、阿毘達磨論書のみに限らず、すべての佛典にあらわれてくる術語についてもいえることであろう。そこで著者は、漢訳された術語を解明するにあたり、その原語をパーリ・ニカヤに求めその用例を初期の成立と考えられるガーターの部分と、比較的後期のものと思われる散文に含まれるものとに分けて整理して、原初的な意味を捉えようとしている。ついで南北アビダルマ論書におけるその語の用例、および定義を検討し、さらに大乘佛教の

経論に見られる用例や意味を追求するという周到かつ緻密な研究態度が全篇を貫いているのである。そこにおいてはじめて佛教の思想が、初期からアビダルマ、大乘へと展開する跡をあとづけようとする。逆に云えば大乘佛教——この論文の中には浄土教に関する術語も多い——が、初期佛教といかに結びつくのかの問題にメスを入れようとしていっている意図が窺える。このような研究は、広い学識を必要とし、梵・巴・藏などの諸言語に通じ、しかもアビダルマ教学のエキスパートたる桜部博士にしてはじめてなし得た業績であろう。以下各篇について、筆者の理解し得たところを紹介してみたいと思う。

二

「初期佛典にあらわれる『行』の語について」は、諸行無常などの *samskṛta* としての行ではなくて、ひろく佛教の実践修道を意味する場合の「行」について、初期佛典における用例が整理されている。漢訳で一樣に「行」と訳されていてもその原語は次の六種に大別される。

I、*vac* 行ずる、行なうこと。

II、*paṭipadā* 苦の滅に至る道など、佛教の説く正道として、*magga* とシノニムに用いられる。

III、*dhāraṇā* 普通「修習」と訳されるが、本質的に心の修習であり、これはそのまま道の修習であるという。

IV、*tapas* 一般に「苦行」と訳され、佛教では棄てらるべき行とされるが、時には力むべき正しい修練の行にも *tapas* が用

いられることもある。

V、yoga の語は、^{へくびきく}の「よく自由を束縛すること」から煩惱の呼称として用いられるが、一方、心の統一、瞑想、禅定の意としても使用され、さらにひろく実践行への専念をも意味する。

VI、vata はずぶきつとめ、特に宗教的な戒行、禁行をあらわす語である。

このように「行」の原語をたどれば種々であり、その意味するところも様々であって、その把握によって、はじめて初期佛教における実践行のあるべき姿を正しく理解することができるとされている。

「初期パーリ佛典に見える『疑』の語について」では「疑」の概念をとらえることにより、その反意語たる「信」のあり方を説明しようとする。初期パーリ佛典における「疑」の原語は次の六種に類別される。1、vicikicchā 2、v'sāṅk 3、kaikha 4、vinati 5、kathankathā 6、saṁsaya

この中、1、3、4、5、6は、ほとんどシノニマスに用いられている。煩惱法、心所法としての「疑」は、ほとんど1が用いられ、^{えしん}の希求相（識別しようとする）から「さまざまに考えようとする」「思い惑う」「疑惑する」との意を生じたものと語源解釈をなし、その「疑」の用例を検討したのち、反意語たる「信」の内容とは、正しい覚知を得ることによって、あれこれと思ひ惑うことのなくなった状態、心の動搖やおそれがなくなり、ものごとを確信をもって了解するに至った

状態にはかならないと結論されている。

「karuṇā, mahākaruṇā, 大悲」は、初期パーリ佛典を精査すると karuṇā (慈) は、ほとんどの場合 mettā (悲) 、 muditā (喜) 、 uppekkhā (捨) とともに出ている。ニカーヤでは karuṇā のみであられることは割合多いが、他の三つが独自で出てくることは少ない。karuṇā の内容としては「正法を説くこと」「衆生を教導すること」などの用例が示されている。また佛陀の徳をあらわす言葉遣いの中では karuṇā およびその縁語や派生語がもっとも多く、mettā やその縁語はほとんど目立たない。経藏後期の釈義文献や論藏になると mahākaruṇā が登場して来る。したがって大悲の術語が成立固定するのは、経藏の後期からアビダルマ時代にかけての頃であろうとし、一方佛陀が一切衆生に対して慈悲に満ちた存在であるというは古くから存在したと結んでいる。同じように慈悲とか憐れみの意に用いられる anukampā については、この論文には取りあげられていないが、この語と karuṇā との関連についても知りたいところである。

「勝解 adhimukhi について」では、著者は「まず北伝のアビダルマ論書、大乘の論書における勝解の意味を論じ、対象をしっかりと捉えてそれを理解し、確認する心のはたらきと定義づける。ついで南伝のパーリ・ニカーヤの考察に移り、ニカーヤには名詞形はあまりあらわれず、動詞の受動形では「結びつけられる」「固定される」「……の上に」置かれる」の意を有し、使役形では「結びつける」「固定する」「定まった場所に」

置く」の意を基本とするとして、*adhi-muc* が心に関して用いられると「その上に〔心を〕着ける」→「それに〔心を〕傾ける」→「それに対して〔心が〕揺がぬ、それを確信する」の意となるとする。そして *adhimutti* が、*āsaya*, *anusaya*, *ajjhāsa*, *saddhā*, *pasāda* と同義に用いられ、*kaṅkhā* や *vikkicchā* と反意語に用いられている例をあげてくる。このことは『十住毘婆沙論・地相品』に「信 *sraddhā* にて清淨 *prasada* 心清淨 *citta-prasāda* 信解 *adhimukti* 堅固信 *adyāśāya* とシノニムに用いられている伝統を、ここにも求めることができ注目される。そしてこのことから *adhimukti*, *adhimutti* は、1、「何かに」意を向ける傾向、2、疑惑せぬこと、確信の二義があり、北伝にいう心所の一つとしての勝解と区別すべきであるとされている。さらに有部の用例として、無為の解脫を挾滅、有為の解脫を勝解とすることにも論及されている。

「特殊な心所法のいくつかについて」では1として「誑と諍」がとりあげられる。従来の佛教辞典によれば、誑の原語として *saṅghya* を、諍の原語として *māyā* をあてているのは誤まりであると断じ、玄奘の漢訳がそうであるように誑は *māyā* で諍は *sāhya* でなければならぬとする。

2、「不樂・頻申・憂耄・食不平等性」ではこの四語はパーリ・ニカーヤにおいては心味劣性とともに慙沈・睡眠を生ずるものとなる煩惱とされている。この四語はアビダルマ論書では大して重視されていなかったが称友の『俱舍論疏』において心所の中の不定法として数えられていることを問題としている。

しかし『俱舍論』の不定法の説明に悪作・睡眠・尋・伺等の法であるという「等」を普光が、貪・瞋・疑・慢が含まれると解積する説が正しく、「不樂」などを突如として心所法に数えあげる称友の説は不自然であると論じられている。

3「厭と欣」では、パーリ・ニカーヤで厭 *nibbidā* も欣 *paṇuṇja*, *paṇoṇja* も、かなり出てくるが、対語として用いられる例はない。この両語が、生死に対する厭悪と、涅槃に対する欣慕という対語として出てくるのは北伝アビダルマ特有であることが指摘されている。ただし有部の正統派では、厭と欣とを独立の心所として認めていないが、異説として認めるものもあったという。

「奢摩他 *śamatha* とその縁語」では、奢摩他は毘鉢舍那とともに、後世の教学では常に相伴って説かれる重要な語であるが、パーリのニカーヤでも早い成立のガーター經典では名詞形で出ることも少なく、まして両語が伴って出てくることは極めて稀である。しかし散文の中には両語を対語にした用例が多く、*śamatha* によって心解脫を成就し、*vipassanā* によって慧解脫を成就するというから、止を定に、觀を慧に結びつけて、戒・定・慧の実践体系の中にそれが説かれていると論じられる。

「無生智と無生法忍」では、無生智はパーリの古い部分にはあらわれず、新しい部分や論藏にあらわれる語であるとし、無生法忍は大乗のみの用語であって、両者は何の関係もないと述べられる。しかしその忍が慧の一つの相を表わす言葉として

理解されているがこの由来をバーリ・ニカーヤの中の *ūṭṭhi-nijjhāna-kkhaṇṭi, dhammanijjhāna-kkhaṇṭi* に見出してゐる。「不退」について——舟橋博士と上杉氏の所論を読んで——では正定聚不退転の思想と、無生法忍との関連について、舟橋一哉博士と上杉思朗氏の所論を紹介し、ついで不退 *avinivartaniya, avinivartya* の語の起源をバーリ佛典の中に求めようと思われるのであるが、明確な結論は得られていない。

「阿迦尼師吒天の呼称について」では阿迦尼師吒天の原語は、*akaniṣṭha* と綴り、時には *aghaṇiṣṭha* としてあらわれるが、この語の原初形態はいずれであり、その意味は何であるかが問題とされている。そして種々論究されるが、結局、その確かな由来は知ることができなとし、おそらく佛敎以前に遡るのであらうとされている。

「玄奘訳『俱舍論』における『体』の語について」では、玄奘訳『俱舍論』に「体」と訳されているものの原語として、1. *svabhāva* 2. *dravya* 3. *bhāva* 4. *ātman, ātmaka, ātmika* の四種が数えられるが、この中「体」なる語で訳される觀念をあらわす代表的な語は *svabhāva* であるとする。『俱舍論・随眠品』に、「法の *svabhāva* はあらゆる時に存在するけれども、法の *bhāva* は常住だとは認められない」と説かれるように、有部の法の理論は、このような実有なる法の觀念の上に打ち建てられたと、有部の考えを明らかにしている。

「説一切有部アビダルマにおける八種の『形色』と六種の『味』は、まず色 (*rūpa*) について有部では顯色と形色とに分

つが、形色は長・短・方・円・高・下・正・不正の八種であるとする。ところで梵文の『俱舍論』によると「方」「円」に当るところが *vitta, parimaṅḍala* となっていて、*vitta* を「方」の意にとることができないことを問題とされる。そこで種々論究の結果、N・タティア博士の示唆によつて次のような推論を下される。原初の八種は漢訳に見られるもので、その中の「方」は梵文『俱舍論・業品』にあるごとく、*catuṣṣṭra* であり、「円」は *vitta* であつた。*parimaṅḍala* は、もともと *vitta* の語が多義を含むところから、それが「円」の意なることを明示せんがために行間に加えられた註記であつたものが、いつのまにか *catuṣṣṭra* が消えて *vitta* を「球」「*parimaṅḍala* を「円」の意に分けて解することになつたとされる。

次の「味」については、漢訳の有部論書に甘・酢・鹹・辛・苦・淡の六味を数えているが、こゝで問題となるのは最後の「淡」で、この原語は *kaśāya* (しびさ) である。本来ならば渋とすべきところであるが、渋とすると有部論書では触、あるいは所触の一種にあるからその混同を防ぐ意味で、その代りに「淡」の語が用いられたのであらうと推論し、他の論書においても完全に一致していることをもつてこの証明とされている。

「華嚴」という語についてでは「華嚴」の原語が *avatamsaka* やあるか、*gandā-vyūha* であるかを論じ、著書はその原語を *avatamsaka* であると断定する。その理由は、「佛華嚴」という場合、*buddha-avatamsaka* という表現はあるが、*buddha-gandā-vyūha* ところが表現はないからであると明解に

結論づけられる。しかもその語は Avadāna 文献中の佛の神変を伝える説話の中に胚胎しているとして用例が示されている。

「世親の『浄土論』に見える『如実修行』の句について」では「如実修行」の句は世親造、菩提流支訳の釈経論によく出てくることをつきとめ、如実の原語については yathāhātam を想起するが、必ずしもそうではない。『文殊師利問経論』はチベット訳があるから、それから推測すると dhavaṇa と anudharmapratipatti が考えられる。anudharma-pratipatti は普通「随法行」と訳されるが、『中辺分別論』と、それに対する安慧釈よりすればこの語は「法界等流の教えによって詮わされた一切の染浄の諸法を、奢摩他、毘婆舍那等の修習によって、それが詮わされたごとく、如実に現証すること」という意味に解釈されるから、流支が anudharma-pratipatti を「如実修行」と訳した意味も理解できであろうとされている。

「親鸞の述作に見える『業』の語の用例」親鸞の述作中には「業」の語が多く見られるが、その意味するところは、一般佛教における業と区別して考えなければならぬ。そこで聖人の直接の述作中からその使用例を抽出して整理したのがこの論稿である。整理に当っては次のように分類されている。Ⅰ、業因、Ⅱ、正定業・正業・浄業など、Ⅲ、大願業力など、Ⅳ、三業など、Ⅴ、雑業・助業など、Ⅵ、悪業・善業など、Ⅶ、業繫・業垢、Ⅷ、その他、これをさらに細分類して、その文を抜書きしてある。これによる論究は未だなされていないが、このように親鸞聖人の業に関する遺文を整理し、これによって業論のみを

研究しても、聖人の教学を浮彫りすることができるであろう。

「附篇『入阿毘達磨論』（チベット文よりの和訳）」では序言において『入阿毘達磨論』の研究がある。すなわち、この論は有部教学の中心である法の体系を簡明に説き明かしていること。作者については、漢訳は塞建地羅とするが、チベットの伝承はそれを伝えないこと、塞建地羅の原名はわからないこと、光記・宝疏の伝える世親の先輩であり、衆賢の師としての塞建地羅とは明確に結びつかないことなどから、まさしくこの作者については結論をひかえている。成立年代は『俱舍論』と同時か、ややそれに先立つ時代の成立であるとし、その理由として五つがあげられる。内容については、八句義の説は世親の『大乘五蘊論』とよく似ているが、心所の説き方については月称の『五蘊論』がさらによく似ていて、全体として見ても世親の『五蘊論』よりも月称の『五蘊論』の方が『入阿毘達磨論』に近いと述べられている。

三

以上のごとく、本書に収録された研究は、佛教語のいろいろな初期の經典から、後期の佛典に至るまで、それぞれにおける用例と意味を検討することによって、佛教思想の展開の跡を見きわめようとされている。このような方法でさらに多くの基本的な佛教語についての説明がなされることにより、佛教思想史がより明確にされることとなるであろう。桜部博士のご専門のアビダルマ教学に関して水も漏らさぬ緻密さで論が展開され

ていることは勿論であるが、さらに初期佛教から親鸞教学に及ぶ博士の博識には、ただ驚嘆するばかりである。ここで一つ欲を言わしていただくならば、佛教語について調査された用例のほとんどが佛典であることは当然のなり行きであるが、さらに

バラモン教やジャイナ教など、佛教以外の文献における用例をも示していただいたならば、佛教がインド思想史上に占める位置も、さらに明確となるのではなからうかと考えるのである。

(昭和五十年七月、文栄堂、A5版、二、五〇〇円)